
再会のヴィオリーネ

春野天使

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

再会のヴィオリーネ

【Nコード】

N9042D

【作者名】

春野天使

【あらすじ】

全寮制音楽学校に通うアネスとターニアは、ヴァイオリンで繋がった親友だった。しかし、ある日突然、ターニアはアネスの元を去っていく。その悲しみに絶望し、夜の街を彷徨っていると、『時間屋』と名乗る男に出会った。彼はアネスの過去と引き換えに、願いを叶えるという……。

(前書き)

グループ小説第十七弾「プロットリレー」参加作品です。
書く順番を決めて執筆者の前の人が、設定、登場人物、あらすじを
考えます。

原案：月朱さん

再会のヴィオリーネ

真夜中の街。

月さえ出ていない暗い路地を、一人の少女がふらふらと力なく歩いている。

顔は青ざめ、肩まで垂らした栗色の髪を乱し、ひたすら歩く。

その正気ない顔が、一瞬だけ夢見るように輝いた。それは、彼女の親友ターニアの奏でるヴァイオリンの音色を思い出した瞬間。

全寮制音楽学校で、共にヴァイオリンを学び、寝食を共にした親友。親友というありきたりな言葉だけでは、表現出来ないほど、二人の仲は親密だった。

家族より心を打ち解け合い。まだ二人とも得たことのない、恋人を思うより深く、お互いに心を通わせ合っていた。

授業の後、音楽室で、何時間もひたすらヴァイオリンを奏でることが、二人の日課。

二つのヴァイオリンの音色は、窓から差す夕焼けの光に溶け合い、やがて、日が西の空に沈み、夜空の小さな星の煌めきの中に吸い込まれいく。

二人は、言葉で語るよりも多く、ヴァイオリンで語り合っていた。そのターニアが、今はもういない。

あなたがいなくなって、私はどうすればいいの……？

少女の顔は、再び悲しみに沈んでいく。音楽学校の発表会を前にして、ターニアは突然学校を去って行った。

「ごめんなさい、アネス……。父の紹介で別の学校に行くことになったの。もっと早く言えば良かったけど、どうしても言えなかった……」

あの日、ターニアが学校を去る前日。いつもの音楽室での練習後、ターニアは突然の別れを宣言した。

「どづいつこと……？」

言っている意味が分からなかった。ずっと永遠に、二人は一緒だと思っていた。

ターニアが行く学校は、国内でも有名な名門校だ。アネスにはとても入学出来ないような、優秀校。

涙さえ出なかった。

悲しみも怒りもおきない。心は大きな衝撃を受け、壊れてしまった。

ターニアのいない毎日が、これほどにも辛いとは思っていなかった。心の支えのヴァイオリンでさえ、ターニアがいなければ、何の興味もおこらない。

無気力、無感動。アネスは、あの日以来魂を抜き取られたような日々をおくっていた。

消えてしまいたい……。

自ら命を絶つ力もなくなったアネス。彼女は学校を出たまま、行くあてもなく、ひたすら街を彷徨い歩く。真つ暗な夜の闇の中、このまま姿を消し去りたい。アネスはそう願っていた。

「お嬢さん、こんな夜更けの一人歩きは危険だ」

暗闇の中から、突然声が聞こえ、アネスは足を止める。

「誰……？」

じつと前方の闇を見つめていると、やがて一人の男の姿が浮かび上がってきた。

黒いマントのフードを目深に被り、長身の男は鋭い目をしてアネスを見下ろす。彼はまだ若く、美しい顔立ちをしていたが、無表情でアネスを見つめる視線は、驚くほど冷たかった。

「私の名は、ジュリオ。『時間屋』を営んでいる」

「時間屋……？」

男に対して恐怖心は沸かなかった。怖がる心さえ、今のアネスにはない。どうなるかと、どうでも良かった。

「どんな仕事なの？」

アネスの言葉に、ジュリオの口元が、少しだけ弛んだ。

「依頼者の願いを叶えること。それが、私の商売だ」

「願いを叶える？ どんな願いでも叶えられるの？」

「ああ。今まで叶えられなかった願いなど、一度もありはしない」

ジュリオは、小さく含み笑いする。

「かわいいお嬢さん、あなたの望みはなんだね？」

アネスは目を伏せ、キュツと唇を結んだ。

「望みなんて何も無いわ。何も欲しくない。ただ、この世から消えてしまいたい」

「この世から消えてしまう？ 命を亡くしてしまうということかい？」

「ええ。もう、生きていても仕方ないの……」

俯いたまま、アネスは投げやりな口調で答える。

「悪いが、その願いを叶えるわけにはいかない」

「どうして？」

アネスは顔を上げ、キツとジュリオを睨んだ。

「あなたは、どんな願いも叶えられると言ったわ」

「フツ、お嬢さんの命を奪うことなどたやすいことだ。だが、あなたが死んでしまつては、私の商売は成り立たないんだよ」

ジュリオは、アネスの心に突き刺さるような、鋭い視線で見つめ返した。

「言つただろう、私の仕事は『時間屋』だと。商売を成り立たせるためには、依頼人に生きていてもらわなければならない。私が欲しいのは、あなたの『時間』だ」

「私の時間……？」

「そう、あなたが消し去りたい過去の時間」

「……あ」

ジュリオはアネスに近づくと、その右手をサツと取った。夜の風よりも冷たい手。見知らぬ男に突然手を握られた驚きよりも、その

氷のように冷たいジュリオの手に驚いた。

「ここに『時間薬』がある」

彼は、アネスの手の中に、小さな茶色の瓶を握らせた。

「過去の時間を消すといっても、全ての記憶を失う訳ではない。あなたが消してしまいたい記憶だけを失うのだよ」

アネスはじつと小瓶を見つめた。

消したい記憶……消してしまいたい私の過去。

すぐに、ターニアの顔が浮かんだ。こんなに苦しい思いをしているのは、みんなターニアのせい。

ターニアのことさえ忘れてしまえば、どんなに楽になるだろう。

「どうだね？ 消しさりたい過去が見つかったかい？」

ジュリオは、アネスの反応を楽しんでいるかのように微笑んだ。

ターニアとの思い出さえなくなってしまうえば、私は元のアネスに戻る。ターニアに会う前のヴァイオリン好きの無邪気な少女に……。

「……過去の時間と引き換えに、私の願いを叶えてくれるのね？」

アネスは顔をあげ、ジュリオを見つめる。ジュリオは微笑みながら頷いた。

私の願い。それはヴァイオリンの才能。

ターニアに憧れ慕いながらも、いつもターニアの才能には勝てなかった。コンクールで優勝するのは、いつもターニア。ターニアの活躍を喜びながらも、心の底では彼女に嫉妬したこともあった。

ターニアに負けないヴァイオリンの技術が欲しい。

「私の願いは――」

ジュリオは、人差し指でそつとアネスの唇を押さえた。鋭い冷たさが唇から伝わる。

「言葉にしなくとも、あなたがその瓶の薬を飲みさえすれば、全ては望み通りになる」

戸惑うアネスの表情を、ジュリオは面白そうに眺める。

「もし、気が変わったのなら、その薬は飲まずに捨てればいい。あ

「あなたの過去は消えないが、願いも叶わない」

「ジュリオはアネスの唇から人差し指を外す。」

「全てはあなたが決めることだ」

「……あの」

黒いマントを翻し、ジュリオは踵を返した。夜の闇の中、足音も立てず、ジュリオは去っていく。

彼は、すぐに闇の中に溶けていった。

茫然と立ちつくすアネス。現実なのか夢を見ているのか定かではない。しかし、アネスの右手の中には、『時間薬』がしっかりと握られていた。

それから一月も経たないうちに、アネスは音楽学校一の生徒となった。

彼女の奏でるヴァイオリンは、聞く者全ての心をとらえた。昼も夜も、アネスはヴァイオリンを弾き続け、みるみるその才能を開花させていった。

もう、彼女を悩ませるターニアは、心から消え去っている。既に、アネスはターニアの顔さえ忘れ、学校に存在したことすら記憶にない。

あの美しい笑顔、心震わすヴァイオリンの音色。全ては、完全にアネスの過去から消えていた。

アネスが数々のコンクールで優勝し、世界中にその名を広めるのに時間はかからなかった。

その腕前は、とうにターニアを超えている。アネスは天才少女と呼ばれるようになった。

だが、それと引き換えに、アネスの無邪気さや優しさは失われるようになった。ヴァイオリンだけを心の友とし、孤独を愛する少女になった。

アネスは高嶺の花。近寄りがたい存在。しかし、アネスは気にも

かけなかった。

ヴァイオリンこそが、命。アネスの全てなのだ。

アネスが『時間屋』のジュリオに出会って、一年後のこと。

音楽学校に、ある女生徒が転入して来た。

彼女の名前は、ターニア。過去に天才少女と呼ばれたヴァイオリニスト。

名門音楽学校に入学した彼女だったが、自ら希望し、もう一度学校に転入してきたのだ。今でもヴァイオリンの腕前は一流だが、名門音楽学校は、ターニアの肌に合わなかった。伸びかけていた才能が、窮屈な学校の中で潰されそうになっていた。

その原因は、彼女が一番理解している。

アネスがいらないから……。

寝食を共にし、いつも傍らに寄り添っていてくれたアネスと別れ、ターニアも辛く苦しい毎日を送っていた。

アネスがいないと、私は私ではなくなる。

悲痛な思いで、父親を説得し、懐かしい学校に戻って来た。

アネスに会いたい！ もう一度アネスと演奏出来たらどんなに幸せかしら。

アネスの評判は、ターニアも知っていた。だが、彼女を羨むことなく、ただひたすら、アネスとの再会を待ち望んでいたのだった。

しかし、再会したアネスの反応は、予想以上に冷たかった。

「アネス！」

一年ぶりに会った親友をしっかりと抱きしめ、喜び合うつもりだった。だが、大きく広げられた両手の中に、アネスは飛び込んでこなかった。

「あなた、誰？」

無表情の冷たい口調。荊トゲのようにとげとげしい態度。

「……ターニアよ。私を忘れてしまったの？」

「私、あなたなんて知らないわ」

茫然と立ちつくすターニアを残し、去っていくアネス。

もはや、アネスの中にターニアはいない。あの薬を飲み込んだ瞬間、世界一大切な親友は、消え去ってしまった。

その日から、ターニアの絶望と苦しみの毎日が始まる。

悲しみに沈んだ心では、ヴァイオリンの腕も上達しなかった。彼女の奏でるヴァイオリンの音色は、暗く苦しい音しか出せなかった。

それから数ヶ月が過ぎ、毎年恒例の学内発表会が行われることになった。

全生徒が集まり、ヴァイオリンの腕前を競い合う。今年は発表会前から、アネスの優勝は確実視されていた。それでも、生徒達一人一人、心を込めてヴァイオリンを奏でる。

くだらない。みんな、なんて下手なの。ヴァイオリンが泣いているわ。

アネスだけは、心の中でそう思い、退屈そうに演奏を聴いていた。しかし、ある生徒が壇上に上がり、ヴァイオリンを奏で始めた時、アネスの心の中で何かがうごめいた。

「……これは」
何でもないヴァイオリンの響き。なのに、心が激しく揺さぶられる。

夕焼けに染まる赤い空。夜空に煌めく数千の星達。優しい春の風。雪の舞う冷たい冬の空。夏の夜に聞こえる虫たちの声。

断片的に、アネスの頭の中に甦る光景。そして、心を震わせる繊細なヴァイオリンの音色。

「ターニア……」

自然と涙がこぼれ落ちた。忘れ去っていたターニアとの思い出の日々。心苦しいほど、慕い合ったかけがえない親友。

一心にヴァイオリンを演奏するターニアと、一瞬目が合う。ターニアも涙をこぼしていた。二人の心が再び繋がる。

だが、次の瞬間。ターニアの細い体が壇上にくずおれていった。ヴァイオリンの弦が切れ、歪んだ音が場内に響く。あちこちから上がる悲鳴。

「ターニア！」

アネスは壇上のターニアに駆け寄る。彼女は血の気のない顔をして、倒れていた。アネスはターニアを抱き寄せる。

「アネス……」

ターニアはアネスを見つめ、薄く笑顔を作る。しっかりと握り合った手と手。だが、ターニアの手はスルリとアネスの手の中から離れていった……。

壇上の横のカーテンが揺れ、一人の男がその様子を見守っていた。「私は言ったはずだ。記憶を取り戻すためには、あなたの魂が必要だと……」

男は低く呟やくと、マントを翻し、踵を返す。静かに去って行く男の後ろ姿には、悲しみが漂っていた。

数日前、一人の少女が街を彷徨っていた。彼女のただ一つの願いは、親友の過去の記憶を取り戻すこと。最愛の友に忘れ去られることほど、彼女に辛いものはなかった。

アネスは、ようやく気付く。自分にとって一番大切なものが何だったのか。だが、それに気付いた時、大事なものは彼女から消え去ってしまった。

永遠に……。

了

再会のヴィオリーネ

(後書き)

読んで下さってありがとうございます！

今回、設定をもらって三日間で仕上げました。内容は、個人的に好みだったんですが、音楽学校の話なんて絶対無理！ と思いました……。でも、どうにか本編の文字数も

五千以内におさまって、ホッとしています。

こういうストーリーは長編で読んでみたいですね！

「ヴィオリーネ」とは、「美識音」という意味だそうです。

今回、素敵な設定を考えてくださった月朱さん、ありがとうございます！
ました！

次回は、私の設定で、執筆者はサラダ油さんです！ お楽しみに！

広告募集中

小説関連広告に最適です。

出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくはPDF小説ネット広告募集をご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9042d/>

再会のヴィオリーネ

2008年11月7日09時20分発行